前世は剣帝。今生クズ王子
Previous Life was Sword Emperor.
This Life is Trash Prince.
著 アルト alto
Ⅲ. 山椒魚
5

イェルク・シュハウザー
ファイの事を前から知っている様子のレガリア王国の謎の男。
ラティファ
ディストブルグ王家に使えるメイド。実はファイの前世の仲間・ティアラでもある。
リヴドラ
獣人国の王子にして〝英雄〟。帝国に強い敵愾心を燃やしている。
ミラン
『観測者(オブザーバー)』と呼ばれる獣人国の〝英雄〟。帝国を滅ぼすべくリヴドラに協力している。
フェリ・フォン・ユグスティヌ
ディストブルグ城のメイド長にして、ファイ専属の世話役を務めるエルフ。
ファイ・ヘンゼ・ディストブルグ
主人公。ディストブルグ王国の第三王子。前世は〝剣帝〟と讃えられた剣士ながら、今生では〝クズ王子〟と揶揄される程のグータラ生活を送っている。
CHARACTER

第一話　とんずら

人間とは不思議なもので、それなりの時間を経れば、記憶を己にとって都合の良いように無意識のうちに改変したり、跡形もなく忘却してしまったりなんて事ができてしまう生き物であった。

だから、決して忘れてはいけない事なんかは手に書くなりして、どうやっても忘れないようにしなければならない。

でなければ、間違いなく痛い目を見るだろうから。貴重な睡眠時間がゴリゴリと削られる羽目になるだろうから。

「それはダメだ」「許せない」「睡眠の邪魔すんな」

そんな言葉達はラティファ（悪魔）の前では一切通じないし、そもそも意味をなさない。

主従関係にあるにもかかわらず、息を吐くように聞いていないフリをされてしまう為、俺の言い分なんてあってないようなもの。

などと考えながら俺、ファイ・ヘンゼ・ディストブルグは、数日前の自分自身の浅慮（せんりょ）を布団に包（くる）まりながら心底悔いた。

どうして〝真宵（まよい）の森〟が存在する街――〝ブィスダン〟にあと十日くらい滞在しようと考えな

かったのかと。
ドヴォルグ・ツァーリッヒの頼みを了承し、〝真宵の森〟へ向かった真の理由は〝連盟首脳会議〟に参加しない為だったじゃないか、と。
ああ、それでは仕方がない、と思える理由作りが目的でもあったじゃないか。
……その事実が完全に頭から抜け落ち、寄り道すらせず、一直線に城へと帰ってきてしまった己の愚かさがどこまでも憎らしかった。
とはいえである。
過ぎてしまった事は仕方がないと割り切るしかないのがこの世の常。
どうすれば安眠が得られるのか。
たとえ何を犠牲にしようとも、その為の究極の一手を模索するしか俺には道がなかった……それ以外に、道は残されていなかったのだ。
「――だから、許してくれと。殿下はそう仰るのですね」
俺が涙ながらにそう語ってやると、般若もビックリの冷酷な形相をしたメイド長のフェリが感情の一切感じられないトーンで言った。
蛇に睨まれた蛙のように、気持ちの悪い汗がこれでもかという程背中を流れていたが、俺には目を逸らし、ほとぼりが冷めるのを待つぐらいしかできる事はなかった。
「陛下から〝連盟首脳会議〟に参加しろと命じられておきながら、見事にすっぽかして部屋で布団に包まっておいて、そのくらい許してくれと」
深い訳があるんだ。
と、言い訳を試みようとも、まともに取り合ってもらえない事は明白。
何より、すっぽかした挙句、自室に戻って面倒臭いからと何食わぬ顔で眠りに入っていたと、俺の世話役メイドのラティファにチクられてしまっている。
しかも、一度は部屋を後にし、参加すると見せかけた上で踵を返して部屋に帰っていったという説明まで付け足されたのだから、フェリの怒りゲージはとんでもない事になっていただろう。
というか現在進行形で、なっている。
「……」
俺に有難い説教をしてくれるフェリの隣に無言で控えるラティファに、「覚えとけよ、てめえ」と責めるような視線を向ける。しかしラティファは「な、なんの事か分かりませんねえ」と言わんばかりのぎこちない挙動で、額に脂汗を浮かべながらぷいと顔を背けた。
……無性に顔面パンチをお見舞いしたくなった。
「……どうして参加なさらなかったのですか」
そんな無言のやり取りをよそに、難しい顔をしながらフェリが俺にそう問い掛ける。
「どうして？」
「……理由は存じ上げませんが、殿下が帝国に拘っていた事は知っておりますので」

……そういえば、帝国の英雄『氷葬』グリムノーツ・アイザックとの戦闘の後のやり取りを、フェリは聞いてたんだったと思い出す。
「言ってしまえば〝連盟首脳会議〟とは、帝国に関する話し合いの場です」
「なのに俺が参加しなかった事が意外だって？」
こくり、と小さくフェリが頷いた。
普段であれば首根っこ掴まれてでも連れて行かれるところだったが、どうしてか今回に限って、ソレはなかった。
俺にとっては実に都合が良かったので、まぁいっかと考えないようにしていたが、フェリのその言葉を聞いて、今更ながらその理由を理解した。
きっと彼女は、帝国に関する事だから何もせずとも俺が素直に参加すると、油断していたのだろう。
「いやいや。どこが意外なんだよ。俺はディストブルグの〝クズ王子〟だろうが？　何よりも睡眠を優先するって信条は不変……って、い、うのは冗談でー！」
何を今更と本音で語ろうとした直後、ただでさえ冷酷だったフェリの顔からゆっくりと感情の全てが削げ落ちていき、睨みを利かせるだけで人ひとりくらい殺せそうな視線を向けてくる。
慌てて訂正する俺の挙動不審具合に、手で口を押さえてぷぷぷと笑いを堪えるラティファが視界に映り込んだが、そんな事を気にしている場合ではない。

「……まぁ、あれだ。騒がしい場所は好きじゃないんだよ」
随分と前に、誰かにその話をしたような気がするが、一体誰にしたんだっけか。
考えてみたものの、思い出せる気配はこれっぽっちもない。
「というか、落ち着かない」
どうせ、参加していたところでロクに口は開かなかっただろうし、会議の途中にもかかわらず場を後にしていた可能性だってある。
だったら、ハナから欠席しておいた方がいいじゃないかと、俺は無茶苦茶な言い訳を重ねる。
「……ですが」
貴方は言い訳を重ねれば逃れられる立場ではないのだ。そう指摘しようとするフェリの発言を遮るように、俺は包まっていた布団の中に逃げ込んだ。
「……ラティファ」
「承知いたしました！　任せてくださいっ!!」
怒りの感情が込められたフェリの冷ややかな声に、めっちゃノリノリに声を弾ませるラティファの返事が続く。そして程なく、がしりと布団の端を掴まれ、グイッと思い切り引っ張られる。
その行為で否応なしに悟った。
このクソメイドは俺から布団を奪う気なのだと。
「……お、まっ！」

奪われまいと慌てて力を込めるも、引き剥がしにかかるラティファの力が尋常じゃなく強い。
たまに発揮されるこの膂力の強さは、ハッキリ言っておかしいで済む範疇を超えている。
というか、主人である俺の命は聞かないくせに、フェリの命は毎度二つ返事で請け負うこのクソ具合は、最早清々しさすら感じる程だ。
「やめろ！　俺の布団が破れたらどうしてくれるんだ!!　多分これお前の給金より高いぞ!!」
「殿下の身の回りのものは全て私が買い揃えてますからそんな嘘は通じませんよ……!!　殿下には良い布団と言ってお渡ししましたが、ぶっちゃけこれは安物です!!」
びりっ、と破ける音と共に衝撃的な事実が告げられる。
「とっとと観念してください!!」
びりびりという布団の悲鳴に続き、俺の悲痛の叫びも自室いっぱいに響き渡った。
「あああああああああ!?」

◆◆◆

布団を奪われたので致し方なしと、毎度お馴染み窓から脱出を試みようとするも、ラティファにガシリと捕縛された。
明日の〝連盟首脳会議〟には参加するという言質を取るまで帰りません、と意固地になるフェリ

相手に無言を貫く事数分。
「――で、これはどういう状況なんだ？」
何か用でもあったのか、俺の部屋を訪ねてきた人物――グレリア兄上が、苦笑いを浮かべながらフェリに疑問を投げかける。
「殿下があまりにごねるので、我慢比べ、といったところでしょうか」
「なるほど。それはファイが悪いな」
救世主のように見えた兄上だが、どうにも俺の味方はしてくれないらしい。
「参加するだけでもいい。一度くらいは顔を見せてくれると助かる。流石に、国内にいて参加しないとなると、ディストブルグは何かを隠してるんじゃないかと不信感が芽生える。それは避けたいんだ」
「ぐ……」
思いもよらない強敵の出現に、俺は眉根を寄せる。
グレリア兄上は、昔から特に俺の事を気に掛けてくれた家族の一人。流石にそんな兄上の言葉を無視するわけにはいかない。
「……わ、分かりました」
それに、顔を見せるだけでいいと言ってくれている。
だったら、出るだけ出て、置物の如く沈黙を貫こう。それでなんとかやり過ごすんだ。

そう自分自身を励ます一方、「私達の言う事は全然聞かないくせに……！」というラティファの不満は当然のように聞き流す。
フェリの言う事を聞く日はあっても、ラティファの言う事を聞く日だけは、考えるまでもなく一生ない。
心の中で、そう告げておいた。
「ところで、兄上はどうしてここに？」
フェリ達に頼まれて俺の説得に来たのかと一瞬思ったけど、それにしては二人の反応が新鮮だった。
「あー、それなんだがな。ファイに会っておきたいって人がいたから、ここまで案内してきたんだ」
グレリア兄上に直々に案内させてしまうとは……そう罪悪感を覚えた直後。
「言っておくが、案内はオレが買って出た事だ。だから、謝罪はしなくていい」
先んじて、笑い交じりにそう言われる。恐らくは俺の顔に出ていたのだろう。
フェリも俺同様何か言おうとしたようだったが、そう先手を打たれてはもはや口を挟めないようで、口を真一文字に引き結んでいた。
「それじゃあ、オレは戻るから。後は仲良くな」
背を向け、ひらひらと軽く手を振りながら、グレリア兄上が部屋を出ていく。

それと入れ替わるように、新たな人影が視界に入ってきた。
そして、聞き覚えのある声が響く。
「話には聞いていたけれど、本当にグータラな生活をしているのね」
荒れに荒れた俺の自室の惨状を目にしながら、面白おかしそうに彼女は言った。
「――お久しぶりね。ファイ王子」
そう、旧知の友にでも会ったかのような調子で俺の名を呼んだ人物は、いつか俺が〝猛進するイノシシみたいな王女〟と評したアフィリスの姫殿下――
メフィア・ツヴァイ・アフィリスであった。

第二話　リヴドラ

「……なんであんたがディストブルグに……って、あぁ、そうか〝連盟首脳会議〟か」
どうしてアフィリスの人間がこの城にいるんだ、と一瞬俺の頭上に疑問符が浮かぶも、それはすぐに霧散する。
〝連盟首脳会議〟の参加国の中にアフィリスも含まれていた事に思い至り、自己解決した俺は、久方振りに顔を合わせた知己を見て呟いた。

「……にしても、今度はちゃんと本物だな」
以前、帝国の〝英雄〟――『幻影遊戯』イディス・ファリザードがメフィアに化けていた事もあって、つい、そんな言葉をこぼしてしまう。
「……本物？」
「あぁ、いや、悪い。ただの独り言だ」
耳聡く俺の呟きを拾ったメフィアが不思議そうに首を傾げたものの、俺は気にするなと話題を変える。
「それで、わざわざここに来たって事は、俺に何か用でもあるのか？」
メフィアの側に、アフィリス王国の国王であり、彼女の父であるレリックさんの姿が見えないところからすると、彼から何か言伝でも頼まれているのだろうか。
が、メフィアは俺の問いに対し、左右に一度、軽く首を振った。
「いいえ。特には。今日はただ、こうしてディストブルグに来たのだから、知己に挨拶ぐらいしておこうと思っただけよ。もしかして、そう思うのは不自然だったかしら？」
「……そうかよ」
律儀なこって。
そんな感想を抱きながら、俺は投げやりに言葉を返した。
その適当具合に、他国の王女に対してなんて対応をしているのだと、フェリから責めるような視線が飛んでくる。
しかし、メフィアが仕方なさそうに笑っていたからだろう、これといってお咎めはなかった。
「もしかして体調でも悪いんじゃ、とも思っていたけれど、その様子だと杞憂だったみたいね」
王子という立場にある人間が、各国の代表が集まる大事な集まりにもかかわらず無断で欠席し、挙句に部屋で惰眠を貪っていたとは夢にも思うまい。
「でも良かったの？　〝連盟首脳会議〟を欠席しても」
「いいんだよ。別に俺一人、いてもいなくても変わりゃしねえ……ん、だから……た、多分」
最後まで言いかけたところでフェリとラティファから思いっきし睨まれたので、言葉尻を慌ててボカす。
「……まぁ、実際に参加するかどうかは置いておいて、俺が積極的に会議に出る事はまずあり得ねえよ。そうする理由がどこにもない」
面倒臭いから、というのも勿論理由の一つだ。
ただ、俺がそう答えた最たる理由は、〝真宵の森〟での一件にある。俺に協力関係を持ちかけてきた帝国所属の〝英雄〟――コーエン・ソカッチオのあのひと言に。

◆◆◆

『――お前が〝異形〟と呼ぶ化け物だが……それを生み出したであろう張本人は既に死んでいる。いや、死んだも同然の状態、が今はまだ正しいか』
全てが終わった後、約束を果たすと言って奴から告げられたのは、そんな不可解な言葉であった。
張本人が死んでいるのならば、どうして俺の目の前にこうも次々と〝異形〟が現れるのか。
それに、お前は張本人が死んでいると知っていて俺に協力関係を持ちかけたのか、と怒りを含ませた言葉を浴びせようとしたところに、コーエンが続ける。
『呑まれた。そう言えば理解できるか？　ファイ・ヘンゼ・ディストブルグ』
直後、頭が真っ白になった。
そして、ゆっくりとその言葉の意味を理解していく。
前世の俺が〝異形〟という存在をひたすらに追い続けた人間であるからこそ、アレの異質さは誰よりも分かっていた。分かっていたからこそ。
『足を踏み入れ過ぎた。それ故に、そいつは最早廃人同然の状態だ』
……嗚呼（ああ）、そういう事かよ。
素直に、そう納得する事ができた。
……俺が前世で最後に目にした〝黒の行商〟も、俺が殺した時には既に、人の姿をしているだけの、ただ『救済を』とひたすら呻（うめ）くだけの人形に他ならなかったから。
『だとしても、俺は〝異形〟を生み出した張本人を殺すぞ。誰であろうと関係ない。廃人になっていようと、斬り殺す。そいつはそれだけの事をしでかしたんだ。そこに妥協はない』
『だろうな。あえて心の中を読まずとも、お前の目を見ればそれくらい分かる。安心しろ。おれはお前を止める気はない。悪は討ち果たされるのがこの世の常だからな』
だから、殺したいなら遠慮なくやってくれ、と。歴史の探究者であるコーエンは笑いながらそう口にした。
『ただ、殺しに向かうにせよ、あのエルフだけは連れて行くな。これは、お前を試した事に対する謝罪代わりの忠告だ』
『……元々連れて行く気はねえよ』
『それならいいんだがな。アレが〝異形〟に変えられたならば、相当骨が折れるぞ。何せ、〝異種族排他〟なんて政策が帝国で掲げられた理由は、異種族をもととして作り上げた〝異形〟が強力であるからだ。降霊なんて真似ができる異種族（エルフ）が〝異形〟に変えられてみろ。きっと間違いなく――』
『――うるせえ』

◆◆◆

そんな会話の記憶が一瞬にして蘇（よみがえ）った。
俺が強引に会話を打ち切った理由は、フェリを連れて行けば間違いなく〝異形〟に変えられる未

来しか待っていないと、コーエンが断じたから。
お前には守り切れやしないと、言外に指摘していたからだ。
……そして、その指摘が正しいと分かっていたからこそ、俺は無理矢理に彼の発言を遮ってしまったのだろう。
もし仮に、俺が一人であったならば、何一つ問題はないはずだ。しかし、守らなければいけない人間が一人でもいた瞬間、それは呆気なく瓦解する。
もし、今回の〝異形〟を生み出した張本人があの〝黒の行商〟と似たような能力を保持していた場合、誰かを守るなんて事はできるはずがない。
一人で戦うのと、誰かを守りながら戦うのとではまるで違う。
だから、俺は言うのだ。
万が一にも、俺が張本人を殺しに向かう時にフェリがついてくる事がないように。本心をひた隠しにし、いつも通りを装って。
帝国などどうでもいい、と。

「参加する理由がどこにもないって、貴方ねえ……」
俺の発言に対し、メフィアは心底呆れ返っていた。
「貴方、つい先日、城で襲われたばかりなんでしょう？　それにその傷も、転んでついたものでもあるまいし」
先日、食堂で刺客と斬り合った挙句、最後は自爆をされたせいで城の一部は改修中。そして〝真宵の森〟での戦闘による傷は未だ完治しておらず、俺の体にはところどころに包帯が巻かれている。
「……なんでその事を知ってんだよ」
「貴方のお兄さんから聞いたのよ。どこかに出掛けるたびに傷をつけて帰ってくるから、気が気じゃないって。私からもなんとか言ってくれって頼まれたの」
なるほど。それもあってグレリア兄上がメフィアを案内してきたのかと合点がいく。
……そして、言われてみれば確かに、アフィリスにリィンツェル、〝真宵の森〟と、ここ最近はどこかに出掛けるたびに傷をつけて帰ってきている気がする。
「……貴方が強い事は知ってる。だけれど……」
「あーあー、分かった。分かった。分かったからお前までそれを言うな」
フェリにラティファ、そしてグレリア兄上に続いてお前もか。なんて思いながら、俺は投げやりに返事をし、メフィアの発言を遮った。
「……心配せずとも、明日の〝連盟首脳会議〟にはちゃんと参加するし、必要以上に無茶をする予定もねえよ」
ついさっき強制的に言質を取られたし。と、胸中で吐き捨てる。
ただ、やはりどう考えても、俺一人が参加したところで何かが変わるとは思えなかった。

そんな考えがもろに顔に出ていたのだろう。
「……心配なのです」
ここまで黙って俺とメフィアのやり取りを眺めていたフェリが言う。
「殿下は言っても聞いてはくれませんから。なので、せめて帝国の危険性をちゃんと知っておいてもらいたいんです」
……俺が暴走する事を前提とした物言いに、何か反論してやりたくもなったが、心当たりしかないので黙っておく。
下手に抗議したところで、言い負かされる未来しか待っていないだろう。
「それに、殿下が〝異形〟と呼ぶあの化け物と相対した事のある者から、新たな情報を得られる可能性だってありますし」
その言葉を耳にして、思わず目を見開いてしまう。
けれど、すぐに冷静さを取り戻す。
確かに、〝異形〟と相対した事のある人間が俺以外にいたとしても、なんらおかしくはなかった。というより、俺以外にいない方がおかしい。
〝真宵の森〟で出会ったコーエンやエレーナの話を聞く限り、帝国の矛先はディストブルグだけに向いているわけではないようだ。
しかし同時に、下手を打ったと奥歯を若干噛みしめた。帝国に興味がない姿勢を見せようとしていたはずなのに、〝異形〟と聞いた途端、こうしてあからさまに反応してしまっている。
やがて、フェリが再び口を開く。
「その者の名は、リヴドラ。ちょうど〝連盟首脳会議〟にも参加している、獣人国の王子殿下です」
おそらくは、〝異形〟にただならぬ執着心を抱く俺の内心を彼女が知っていたからこそ。そんな言葉が、続いた。

第三話　花屋にて

フェリのその言葉の直後。
どうしてか、メフィアの表情が明らかに険しくなった。
「……王家の血筋の方であれば、彼に対してそのような反応をされるのが当然でしょうね」
だがフェリにとっては、メフィアの反応は想定の範囲内であったのか。
彼が〝連盟首脳会議〟に参加しているという事実に憤慨していた人間は、一人や二人ではありませんでしたから――フェリは苦笑いを浮かべながら、言い辛そうにそう言葉を続けた。
「……？」

世情に疎い俺からすれば何がなんだか、訳が分からず眉を顰める。
「リヴドラは、王族という地位を買った人物です。〝英雄〟と呼ばれる己の力を貸す、という約束と引き換えに」
「そりゃまた、変わった奴もいたもんだ」
俺は抱いたままの感想を吐露する。
王族の地位を捨てさえすれば平穏に過ごせるならば、諸手を挙げて捨ててみせる俺にとって、そのリヴドラという奴の考えは理解の埒外にあった。
「……はい。ただ、それだけならまだ〝変わった奴〟程度で済んだでしょうが、ことリヴドラに関しては看過できない悪い噂も多くありまして」
「例えば？」
「……義兄にあたる第一王子ガザレア殿下を殺した――などです」
軽い気持ちで尋ねてみた結果、予想を大きく上回る内容に、俺は思わず閉口してしまう。
「だから、王族という立場にある人間は誰もが彼を嫌悪しています。王族の地位を貶めた事にとどまらず、あまつさえ正統な王位後継者であった義兄を私利私欲の為に殺したような輩などは存在すら認識したくない、と」
しかし幾ら地位を買ったとはいえ、王族に迎えられた以上、誰がなんと言おうと彼は王族である。それに当の獣人国にしても、その交換条件として〝英雄〟と呼ばれるだけの力を手にしたのであれば、それを不用意に手放したくはないだろう。
……実際に見聞きしたわけでもないのに、彼の周囲にいる者達の思惑が透けて見えた。
「だろうな」
けれど、ただ一つ。
少しだけ引っかかる点があった。
リヴドラについてではない。
フェリの考えについてだ。
俺に対して過保護の三文字が服を着て歩いているようなフェリがどうして、そんな奴に会いに行く事を推奨する物言いをしたのだろうか。話を聞く限り、彼の危険性を知らないわけではないだろうに。
俺にはその意図が分からなかった。
リヴドラの名を出した際に、彼女らしくないぎこちなさをどことなく感じたけど、それを問い詰める気は更々ない。何故なら俺は、言いたくない事を聞き出そうとする気などこれっぽっちもないから。
「その話が本当なら、俺だって関わりたくねえよ。あーあ。そんな物騒な奴がいるんなら、俺は部屋に引きこもって自分の身を守らなきゃいけねえかなあ――」
なんて。

彼の名が出た途端に少しだけ張り詰めてしまった空気を和ませるべく、そして怠惰に過ごしたいという願望を口にしてみたものの――

「ですが、帝国憎しという彼の感情に嘘偽りはありません。だからこそ、〝連盟首脳会議〟に出向いたのでしょう」

「……」

まるで、俺という存在はいないのではと錯覚してしまいそうなくらい、フェリに見事なガン無視をされてしまった。

願望の内容がダメ過ぎたのだろう。

「……冗談だっての。でも、怖い怖くない関係なしに、俺はそいつと進んで会う気はねえよ。知りたい事は、もうどこぞの考古学者から全部聞き出してるし」

俺が欲しかった情報は、既に〝真宵の森〟で得ている。そしてフェリに心配されずとも、〝異形〟の危険性は誰よりも俺が理解している。帝国の危険性も、同様に。

何より、俺は気心の知れた人間以外と関わりを持ちたくはないと思っている。

だから、そのリヴドラと会う気も、会う理由も、何もかもがない。

故に、俺は首を横に振った。

「考古学者……コーエン・ソカッチオですか」

すると、フェリの眉間に皺が寄る。

あのコーエン・ソカッチオの言葉を信じるのはいささか軽率過ぎるのでは、と言いたげな表情だった。何せ、彼は帝国側の人間であったはずだから。

でも、俺の考えは違う。

「案外、ああいう奴の方が信頼できるもんだ」

それにコーエンは、帝国の〝英雄〟である『氷葬』グリムノーツ・アイザックと俺との戦闘の際、傍観に徹していた。

俺としては、コーエンがグリムノーツに助力したとしても負ける気は更々なかったが、それはそれとして。

帝国側の事情はそう単純ではない。『逆凪』と『氷葬』という〝英雄〟が二人も失われ、かつ元々周囲からの信用度が低かったコーエンだけが生き残ったとあっては、彼がそうなるように裏切り者扱いを受ける可能性は極めて高い。

とすれば、コーエンが己の生き甲斐である歴史の探求を続ける為には、首謀者を俺に伝えて倒してもらう事こそが、奴にとって最善手と考えて間違いなかった。

だから恐らく、嘘はついていないだろう。

……厚意から差し伸べられた手よりも、打算に満ち満ちた手の方が余程信が置けてしまう己の捻くれ具合に、少しだけ嫌気が差した。

「まぁとにかく、グレリア兄上と約束した以上は〝連盟首脳会議〟にちゃんと参加するし、心配い

らねえよ」
だから、リヴドラなんて餌を吊り下げずとも心配いらねえとだけ告げて、俺は腰掛けていたベッドから立ち上がる。
「て事で、ちょっと外を歩いてくる」
引き続きこの三人と同じ空間にいては、何かにつけて俺が責められるであろう事は明らかであったので、逃亡を決め込む。
幸い、〝連盟首脳会議〟に参加を求められていた手前、一応服装は外着だ。このまま外に出ても問題はなかった。
「それじゃ」
たまには一人でのんびりと行動したかった俺は、ドアから出てはフェリかラティファがついてくる可能性が高いと判断し、またお馴染みの窓を開け、そこから身を乗り出す。
何やらメフィアの呆れ交じりの声が聞こえたような気もしたが、それに構っている暇はない。
さて、どこで昼寝をするか。
などと考えた時。
「――殿下」
底冷えのするようなフェリの声が、俺の鼓膜を揺らす。
決して大声ではなかったはずなのに、何故かその声からは身の毛が残らず逆立ってしまう程の圧

が感じられた。
このまま無視をするという選択肢も一応あるにはあったが、それはリスク・リターンが見合っていなさ過ぎる。
俺は、足を止める他なかった。
「私もすぐそちらに参りますので、少々お待ちください」
「……」
直後、「ラティファ、殿下の事を見張っててください」などという言葉も聞こえてくる。
どうやら、俺に単独行動は許されていないらしい。
最早、メイドというより見張り役である。
……こうなったのも、ある意味自業自得といえば自業自得なのだが、俺はため息を漏らさずにはいられなかった。

◆◆◆

フェリを隣にしながら、庭に赴いて昼寝をするなどと言おうものならば、雷が落ちる事間違いなしである。仕方なく俺は、少し時期は早いけれど部屋に飾ってある花を変えておくかと考え、知人のウォリックが経営する花屋を訪れていた。

俺が訪ねる時は決まって閑散としている花屋であったが、今日は珍しくドア越しに人気が感じられた。
「――花屋はいるか」
お決まりの言葉と共にスライド式のドアを開けようとしたところで。
「……殿下。私は外で待たせて頂きます」
フェリが何故か気まずそうな表情を浮かべながら、そんな発言をした。
花屋か花そのものに苦手意識でもあったのだろうか、などと思いつつ、「そうか」とだけ返して俺は店へ足を踏み入れた。
中には見知った顔のウォリックと、もう一人――長椅子に腰掛ける、黒の帽子を被った痩躯の男。
「これはこれは。ファイ王子殿下」
もう何度となく行ってきたウォリックとのやり取り。けれど、今日は少しだけ、その決まり切ったはずのやり取りに変化があった。
「お客人がお見えになられてますよ」
「……お客人？」
そう言われ、俺の視線は花屋に居合わせたもう一人の人物へと向かう。
「……勘違いじゃないか？」
不躾にならない程度に一瞥した後、俺が口にしたのはそんな言葉。

「いえ。このお方は間違いなく、ファイ王子殿下に会いに来たと。そう仰ってましたよ」
「……」
そう言われてもう一度だけ視線を向けるが、やはりその女受けしそうな端整な相貌に心当たりはない。
「俺は今日、誰とも会う約束はしてねえし、そもそもそこにいる奴の事を俺は知らない」
〝ど〟が付く程に交友関係が狭い俺の場合、昔の知り合い、という線もあり得ない。
加えて、花屋で待っているという点もあまりにおかしい。
隠しているつもりはないが、俺がこの花屋に時折来ている事を知る人物はごく一部だし、そもそも、今日ここに来ると決めたのはついさっきだ。普通、王子に会いたいのならば王城に向かうだろうに、あえてここに向かった意図が皆目見当もつかない。
その時、男が口を開いた。
「――確かにキミの言う通り、おれとキミはこれが初対面だ。だけど、キミとは一度話しておきたくてね。ま、戦闘能力だけが〝英雄〟の能じゃないって事さ」
「……」
〝英雄〟。
その言葉に、どこか覚えのある嫌な予感がする。
内容から察するに、黒帽子の男が〝英雄〟絡みの人物であるのは間違いない。

……ただでさえ、最近は働き過ぎてるっていうのに、これ以上の面倒事は御免だ。
胸中でそんな言い訳をこぼし、回れ右をしたい衝動に身を委ねかけたものの、あえて花屋を選んで押しかけてきた黒帽子の男から逃げられる気はしなかった。
「〝霊山〟の巫女はおれに会いたくないらしいけど、まぁいいさ。今日おれが会いに来たのはキミであって、彼女じゃあないからね」
〝霊山〟という言葉には聞き覚えがなかったが、巫女という言葉の方には、若干の心当たりがあった。
「キミは、〝連盟首脳会議〟なんて場を設けられようとも、まともに口を開く気はないんだろう？」
極め付きが、〝連盟首脳会議〟。
なんとなくだが、黒帽子の男の正体が見えてきた。
「だから、こうして押しかけさせてもらった。キミと話をしたいというおれの願いを叶えるならば、こうするのが一番確実だろうからね」
彼の言う通り、俺は〝連盟首脳会議〟に参加しようとも意欲的に発言をする気は更々なかった。
銅像の如く口を閉じて時間が過ぎるのをただただ待ってやろうと、そう考えていた。
「単刀直入に、尋ねたい」
言った直後、男がほんの少し俯いた事により、帽子のツバで表情が隠れる。
「なんでキミは、帝国の〝英雄〟を全員殺さなかった？　なんで、殺せたはずのコーエン・ソカッ

チオをみすみす見逃した？」
あまりに唐突過ぎるその問いのせいで、俺の表情もつい、引き締まる。
……その事実を知っているのは、あの戦いの場にいた人間のみ。フェリ、ラティファ、そしてコーエンとエレーナだけだ。
しかしいずれも、吹聴するような人間ではない。
目の前の男はどうやってそんな事を知り得たのか、と疑念が湧き上がる。
けれど、男は俺の返事を悠長に待つ気はないらしい。
「……悩む程の質問じゃあないだろう？　早く答えなよ。返答次第では、おれはキミを殺さなくちゃいけなくなるからさ」
急き立てる言葉に込められた感情は、憤怒だろうか。
帽子のツバに隠れて表情ははっきりと読み取れないが、震える声音から、彼の内心が穏やかでない事は分かった。
「……いきなり過ぎて話が上手く理解できないんだが」
「帝国に与している者は、たとえ誰であろうと例外なく殺す。それがうちのやり方でね」
どうやら、彼は俺が帝国と通じているのではないかと考えているらしい。
で、疑わしい俺にこうして接触した、と。
〝異形〟を生み出している連中に与するくらいなら死んだ方が万倍もまし。そう言ってやりたかったが、それで納得してくれるような輩であれば、きっとこんな事態には陥っていない。
「……そうかよ。そりゃご立派な方針だ」
降って湧いた災難に、思わずため息をつきたくなった。
……だから俺は、静かに部屋に引きこもっていたかったんだよ。

第四話　観測者

「でもそれは、あんたの方針であって、間違っても俺の方針じゃない。俺は俺の考えに従ってアイツを見逃した。ただそれだけだ」
俺を天秤に掛けこそしたものの、コーエンは一度として俺に刃を向ける事も、俺の周囲の人間を傷付ける事もしなかった。だから――
『お前のような立場の人間が、本当におれを見逃してもいいのか？』
去り際に、念を押すようにそう尋ねてきたコーエンに俺は、『そんなに捕まりたいのなら、面倒だがディストブルグの牢獄に連れていってやるぞ』と言って、追い返した。
誰もが勘違いをしているが、そもそも、間違っても俺は誰でも彼でも殺せるような人間じゃあない。前世では周囲から心が弱いと言われ続け、人を殺すという行為に最後の最後まで疑問を抱き続

けていたような人間だ。
それを今生も尚引きずっている俺は、たとえ帝国の人間であろうと、必要がなければ殺さない。そんな、当然といえば当然の考えを持っていた。
「誓って、他意はない」
黒帽子の男にどう捉えられようが構わない、というのが本音であったが、それでも〝異形〟を生み出した連中と同類と思われるのは腹立たしかったので、一応否定はしておく。
「そもそも俺が帝国に与してるのなら、城で襲われる事も、『氷葬』みたいな戦闘狂と戦う事もなかっただろうよ」
疲労感を滲ませながら、俺は続ける。
「最後まで手を出してこなかった人間を殺さなかっただけで、帝国の仲間扱いだ？　随分と横暴だな。こっちは堪ったもんじゃねえよ」
むしろ、本当に俺が帝国に与している人間であったならば、逆にコーエンを殺していた事だろう。帝国最強だという『氷葬』をではなく、『心読』と呼ばれる頭の中を覗く能力を持つ信頼できないコーエンこそを、この機会に殺していたはずだ。しかし、そうはしなかった。
「知ってるだろうが、俺はディストブルグの〝クズ王子〟。そもそも〝英雄〟なんてもんは柄じゃねえし、叶うならば部屋にこもって布団に包まっていたいだけの人間だ。そんな俺が、何が悲しくて帝国に味方しなきゃいけねえんだよ」

ファイ・ヘンゼ・ディストブルグとして生きてきた十四年間。一日のぶれすらなく、その考えを持ち続けてきた。それは事実だ。
心を読めるコーエンのような相手でない限り、こうして事実ではあるが同時に表向きの理由で説明するのが一番だろう。
「……確かに、〝連盟首脳会議〟を欠席してまで呑気に惰眠を貪っていた人間が、帝国に与しているとは考え難い」
……なんでそれをあんたが知ってんだよ。
胸中で抱いた疑問を言葉にして投げつけてやりたかったが、話が進まないのは面倒だったので、半眼で睨み付けるだけに留めておく。
「だけど、その年齢であれ程の戦闘能力。加えて、キミには帝国の血が流れていると聞く。ここまで条件が揃っていれば、疑わない方がおかしいとは思わないかな」
つまり。
年齢にそぐわない戦闘能力は、帝国が生み出した〝異形〟のように、何かタネがあるのでは。
この男はそう邪推しているという事だろうか。
――こいつは俺にとって所詮、ただの他人。明日には忘れているかもしれないような存在だ。だから、言葉に耳を貸す必要なんてどこにもない。いかに腹の立つ言動であろうと黙殺すればいいだけ。

頭ではそう分かっている。
ただ、〝異形〟と己を同列に語られる事はそれでも看過し難い。これ以上こいつの言葉を聞いていると、手が出てしまう可能性すらあった。
「……俺は要求通り、あんたの質問に答えた。これで満足だろ。とっととどっかいけ」
「いいや。その答えじゃあまだ信用はできない。だから――」
「――いい加減にしてください。リヴドラ」
俺でもウォリックでもない、新たな声の介入。
それは、外で待っていると言ったはずのフェリの声だった。
「おっと。てっきり、キミはおれの前には出てこないものと思ってたよ、〝霊山〟の巫女」
ドアを開けて顔を覗かせたフェリに向かって、黒帽子――リヴドラと呼ばれた男が言う。
――そうか。こいつが、獣人国の王族の地位を買った男か。
「……ええ。私は貴方と会うつもりはありませんでした……何をそんなに苛立っているんですか。殿下が帝国に与していない人間である事は明らかでしょうに」
なのにどうして、そうまで執拗に問い詰めるのだと、俺に代わってフェリが言う。
「苛立ち、ね。ああ、うん。そうだ。そうだとも。キミの言う通り、おれは苛立っているとも」
程なくして、男の表情を隠していた帽子のツバが上がる。彼の瞳はドロリと濁っているもののどこか薄らと煌めいており、それは正気でないと形容するのが相応しいものであった。

「〝連盟首脳会議〟なんて大層なものを開催したにもかかわらず、集まったのは弱腰の老人ばかりだよ……なんで分からない。時間をかければかける程、被害が大きくなると。死人が更に増えると何故分からない。迎撃態勢を整える？　……帝国から攻められた時には既に手遅れだと何故分からない。何故誰も理解しようとしない」
リヴドラの言葉は正しく悲鳴だった。
心からの絶叫だった。
「そりゃ苛立ちもするさ。おれはてっきり、帝国を攻め滅ぼす段取りを組む為に呼ばれたものだと思ってたんだからね」
だが、蓋を開けてみれば、守勢に回る事しか考えていない弱腰連中の知恵袋扱い。
怒るのも当然だろう？　と、リヴドラは言う。
「その矢先に、コレさ。ディストブルグの王子が帝国の〝英雄〟を逃したと、『観測者』から情報が来た。怒りをぶつけるなという方が無理な話だとは思わないかな」
「……『観測者』？」
聞き慣れない単語に疑問符を浮かべる俺に、フェリが補足する。
「獣人国の〝英雄〟です。確か、名はミラン。彼女が持つ圧倒的な情報量故に、『観測者』と呼ばれています」
――戦闘能力だけが〝英雄〟の能じゃない。

……なるほど。さっきの彼の言葉はそういう意味だったかと理解した。
俺が花屋に来る事も、コーエンを逃した事も、全てその『観測者（オブザーバー）』と呼ばれる人物から聞いた、と。
「……ですが彼女は、誰に対しても協力的ではなかったはずです」
にわかにフェリの表情が険しくなる。
「く、はっ、ははは っ……〝霊山〟の巫女殿は一体何年前の話をしているのやら。彼女が非協力的だったのは、五十年以上も前の話だ。キミがディストブルグに匿（かくま）われたあの日から、一体どれだけの同胞が帝国に殺されたと思ってる。頭の固かったミランですら、考えを覆（くつがえ）さざるを得なかったんだよ」
「……」
その言葉に、フェリは閉口した。
「知らないだろうが、ミランの奴も帝国の連中に故郷を滅ぼされたんだ。おれやキミと同じく、ね。だから、彼女は協力的になった。帝国を滅ぼす為なら協力を惜しまない、と」
なんらかの理由があって、フェリがディストブルグに身を寄せている事は知っていた。
だけれど、それが故郷が滅ぼされたからだとは知らなかった。耳にしたその事実に、俺は複雑な感情を抱いてしまう。
やがて、リヴドラは長椅子から立ち上がり、言った。

「どれだけ帝国が危険な存在になっているのか。少なくともキミ達は、あの老人共よりはよっぽど理解しているはずだ」
俺の場合は、〝異形〟と戦い、〝英雄〟と戦い、紛れ込んでいたスパイであった騎士の男に殺されかけた。
フェリに至っては、故郷を滅ぼされている。
「なのに何故、声を上げない」
きっと、リヴドラの俺に対する怒りの出どころは、そこにあったのだろう。
危険性を理解しているはずなのに、どうして今すぐに国王にそれを伝え、帝国に攻め入る手はずを整えないのだ、と。
簡単な事だ。
――〝異形〟が今も存在しているという事実は、他でもない俺の不始末。だからこそ、その尻拭いは俺がやる。遠い昔に誓ったように、〝異形〟は全て俺が殺し尽くす。
だから、他の誰かを巻き込むなんて手間をかける気はなかった。それだけの話だ。
「逆に聞くが、声を上げてどうなるよ？　〝クズ王子〟と悪名高い俺と、一介のメイドでしかないフェリが声を上げて、一体どうなるよ？」
一部からは〝英雄〟扱いを受ける俺だが、〝クズ王子〟という蔑称（べつしょう）の方が未だ馴染みは深い。そんな奴が〝帝国は危険だから今すぐ攻めるべきだ〟などと言ったところで、不必要に国を割るだけ

だろう。
そして何より。
「復讐がしたいなら、あんたの掲げる信念とやらに共感してくれる奴だけで勝手にやってろ」
恨む理由は分かる。
憎悪を燃やす気持ちも分かる。
たった一度の理不尽で全てを奪われた者の気持ちは、これでも分かっているつもりだ。
かつての俺自身が、そうであったから。
けれどだからといって、仲良く手を取り合い、みんなで一緒に打倒帝国を掲げて――はい、めでたしめでたし……間違いなく、そんなに上手く事は運ばない。
何より、ディストブルグにさえスパイがいたのだ。他国にもそれなりに潜んでいるだろうし、多くの兵を動かすとなればそれだけ隙が生まれる。
声を上げる事はすなわち、王に死ねと言うようなものだろう。
学のない俺ですら、それは理解できる。
故に、にべもなく吐き捨てた。
どうしても今すぐ攻めたいのなら、あんたらだけでやってろと。
「……」
無言のリヴドラが、俺からフェリへと視線を動かす。

その視線は、キミの考えも同じなのか、と問い掛けていて。
しかし、何を思ってか、フェリはそれに言葉の一つも返さなかった。
「……まぁいいや。今回は、〝霊山〟の巫女に免じて見逃すよ。ただ、死にたくないなら、不審な動きは見せない事だね」
〝異形〟を殺し尽くせてもいねえのに、大人しく死んでやるつもりはねえよ。
そう言い返してやりたくもあったが、これ以上話が長引くのも、彼の顔を目にするのも勘弁願いたかったので、黙っておく。
「にしても、水竜の奴も実に哀れだ。一族の者達が命懸けで守った巫女が、こんな腑抜けだったなんてさ。連中も、あの世で悲嘆に暮れてる事だろうね」
すれ違いざまにそんな捨て台詞を残して、花屋を後にするリヴドラに対し――
「……面倒くせえ奴」
俺はそう言わずにはいられなかった。

第五話　ちっぽけな変化に

心に余裕がない、とでも言うべきか。リヴドラには、誰も彼もが敵に見えているのだろう。

「――まるで狂犬だな」
俺がそんな感想を漏らした直後。どうしてか、罪悪感に押し潰されているかのような険しい表情を浮かべるフェリから、謝罪の言葉がやってくる。
「……申し訳、ありません」
「なんであんたが謝るんだよ」
明らかにフェリ自身も敵視され、罵倒に近い言葉を投げ付けられていたにもかかわらず、彼女が俺に謝る理由が分からなかった。
「一応、あれでも私の知り合いですので」
何度も〝霊山〟の巫女と呼びかけてきたのだ。彼とフェリに面識がある事は、当然ながら俺にも既に分かっていた。
「……昔はもっと、優しい人だったんですけどね」
そう言うフェリの表情には、憂愁の影が差していた。
近しい人間が死ねば、誰だって変わってしまう。それでも尚、周囲に気を配れたり、心情を隠し通せたりする者は、心が強いのだ。
たったそれだけの事。
「だから、殿下の力になってくれると、そう思っていたんですが……」
「その割に、随分とあいつを避けてたな」

そう言って俺は小さく笑う。
そして、知己であり、頼れる人間と認識していたなら、花屋の外で待つと言ったのはどうしてなんだよ、と続けて問い掛けてみる。
「優しい人であった事は確かなんですが、なにぶん好戦的な人だったので、私は顔を合わせない方がいいと思ったんです」
ディストブルグに身を寄せて、復讐なんてものとは程遠い生活を送っていた自分の事は特に嫌っているだろうと理解していたから、とフェリは答えてくれた。
「……嗚呼、そういう事かよ」
確かに、先程の短いやり取りからだけでも、フェリとリヴドラの性格は合わないだろうなと感じ取れた。
争い事を好まない性格のフェリが、できる限り顔を合わせないようにと気を回すのは、至極納得できる。
「……悪いな、花屋。面倒事に巻き込んで」
そして俺は、すっかり蚊帳の外となっていたウォリックに視線を向け、謝罪を一つ。
「いえいえ。私は客人をお招きしたまでございます。それにうちは元々客足が少ないので、営業に差し支えもありませんでしたし。どうぞ、お気になさらず」
「助かる」

「……それにしても、あのお方はリヴドラ王子殿下であらせられましたか」
ほんの少しばかり名残惜しそうに、リヴドラが出ていったドアを見つめるウォリック。
「あいつを知ってるのか？」
「私は、ディストブルグに来る前はリィンツェルで商売をしていた。以前、そうお話ししましたよね」
「ああ、それは聞いた」
「そして、リィンツェルの前は、獣人国で商売をしていたんですよ。リヴドラ王子殿下の事はその時に少々」
色々な場所で商売をしていたとは聞き及んでいたが、獣人国までもとは思わず、つい目を見張ってしまう。
「とはいえ、以前お見かけした時とは雰囲気が全く異なっていたので、言われるまで気づきもしませんでしたが。ガザレア王子殿下が亡くなられてから豹変してしまった、というのはどうやら本当だったようですね」
「……兄を殺した、ってやつか」
「ええ」
言ってはみたが、別に他人の事を詮索する気はこれっぽっちもないので、俺はここですっぱりと会話を断ち切ろうとする。

しかし、そこにフェリが待ったをかけた。
「……リヴドラについて、何かご存じなのですか」
リヴドラと知らない仲ではないフェリだからこそ、己の知っているリヴドラと、今のリヴドラとの差異についての疑問を解決したかったのだろう。
「貴女のお役に立ちたいのは山々ですが、私は所詮しがない商人。知っている事は精々風の噂程度でしかありません」
しかし、ウォリックは彼女の問いに対し、首を横に振る。
「ですが、数年とはいえ獣人国で暮らしていた私からすれば、ファイ王子殿下も知るその噂は、信じ難いとしか言いようがありませんね」
正統後継者であった第一王子をリヴドラが殺した、という噂。
「又聞きでしかないが、アイツは王族の地位を買ったんだろ？」
「はい。ただ、あまり知られていませんが、リヴドラ王子殿下は第一王子であらせられたガザレア王子殿下の協力があってこそ、王族に迎えられたのです。お二方の仲の良さを知る人間からすれば、あの噂は未だに信じ難いんですよ」
ウォリックの話通りならば、確かに信じ難い。
他者から見ても仲の良かった二人。しかもリヴドラは、ガザレアに恩義を抱いていたであろう立場だ。

自分の味方をわざわざ殺すに足る程の理由があるのか。そう考えると、確かに首を傾けざるを得なかった。
「ですので、リヴドラ王子殿下を優しいと仰る貴女のお気持ちには、私も同感なのですよ」
ウォリックは、未だ険しい表情のままであったフェリにそう言葉を掛ける。
「もしかすると、私達では到底考えつかない複雑な事情があるのやもしれませんね」
「……複雑な事情、ですか」
「ええ。たとえば、『修羅』にならざるを得ない出来事に襲われた、など」
――『修羅』に、なれ。
――『畜生』に堕ちてしまえ。
剣を振るい、人を殺すって事はつまり、そういう事だよ。
不意に思い起こされるは、前世でのヴィンツェ(先生)ンツの言葉。『修羅』なんて言葉は滅多に耳にしない分、そのたった二文字の言葉がトリガーとなって、遠い記憶が薄らと蘇った。そして泡沫のようにふっ、と消え失せていく。
きっと、そのせいだろう。
「――――……ま、世の中には、幾ら殺したくないと願おうとも、そんなちっぽけな願いすら叶わない時もあるくらいだからな」
そんな言葉が俺の口を衝いて出てきた。人生に、理不尽な不幸は付きものなのだから。

「ただ、仮にその噂が真実だったとしても、俺の知った事じゃねえわな」
初対面から敵意を振りまいてくるような人間でも、困っているかもしれないから手を差し伸べ、助けてやる――わざわざそんな事をする程、俺はお人好しでも聖人でもない。何より、リヴドラ自身もそんな事は望んでいないはずだ。
だから俺ができるのは、同情する事くらい。お前も運がなかったな、と思ってやる事くらいだ。
「相手が『助けてほしい』と望んでいるならまた話は別だろうが、そうじゃねえんならただの余計なお節介でしかないと、俺は思うよ」
そう言って俺は、ウォリックの言葉を聞いて物憂げな面持ちで思案を始めていたフェリへと、一瞬ばかり視線を向ける。
俺という存在(護衛対象)がいなければ、今すぐにでもリヴドラの後を追いかけたであろうお節介なメイドの思考が、手に取るように分かってしまったから。
「……そう、ですね」
フェリとリヴドラの関係について、俺は何も知らない。これまでフェリの出自について全く知らなかったし、知ろうともしてこなかった。
だから、彼女にとってリヴドラという者がどれ程大切な存在であるか、俺には分からない。分からないから、関わらない方がいいという言葉を選んでしまう。
――俺の側にいてくれる人達を、失いたくない。

俺からすれば、その感情さえはっきりとしているのならば、後はどうでもよかった。
故に、帝国に憎悪を燃やすリヴドラに進んで関わろうとはするなと、俺は遠回しに彼女に告げてしまったのだろう。
〝異形〟に関われば、誰かを失うというイメージがあまりに強かった。
「だけど、ま、ま、ぁ、どうしてもって時は、声を掛けてくれよ。〝クズ王子〟の俺風情がフェリの力になれるのかは知らねえが」
俺の能は、剣を振るう事くらい。
全くもって褒められたものではないんだが、こと帝国絡みの話に限り、幸か不幸かそれはおあつらえ向きと言える能であった。
「……」
何故か、フェリはポカンと目を丸くしていた。
しかしやがて、どうしてか俺を見てクスリと笑う。
「……なんだよ」
「いいえ。なんでもありません」
言いたい事があるんならはっきりと言えよ。
半眼で睨め付けながらそう問い掛けても、フェリは機嫌良さげに首を横に振るだけ。
……その反応が全く納得いかなかった。

そんな中、ウォリックからふと思い出したように声を掛けられる。
「そういえば、ファイ王子殿下が花屋に誰かをお連れになる事は、これが初めてですね」
「……そうだっけ？」
言われてみれば、そんな気がしてきた。
ここへは城を抜け出してくる事が殆どだったし、何度かついてこようとしたラティファは毎度毎度撒いてやったっけか、と思い返す。
「ええ。『メイドを一度でも連れてきたら、次から絶対ついてくるだろ。花くらい一人でゆっくりと選びたいんだよ』と、仰っていたではありませんか。ですから、私はてっきり――」
「……そういえば、そんな事も言ったな」
確かに、いつだったかウォリックに向けて言っていたと思い返す。
あの時の「連れて来たくない」は、「一人でいる時間を大事にしていたい」というようなニュアンスで言い放っていたものだった。
けれど、その実、先生達を想う時間くらい一人でいたいというのが俺の本音であった。
「……その事、完全に忘れてた」
けれど、ウォリックに指摘されて漸く思い出せたその事実に、しまった、という感情こそ湧き上がれど、最悪だ、という感情は不思議と存在していなかった。
無意識のうちに、フェリにならもう知られてしまってもいい、とでも考えていたのだろうか。

などと思いつつ。
「まぁ、なんだ。隠そうにも隠しきれなくなっただけだ」
何故か少しだけ嬉しそうに笑むウォリックの表情を眺めながら俺は、そう言葉を返した。

第六話　波乱の幕開け

それから当初の予定通り、いつも飾ったきりラティファに世話を任せきりにする花を買ったのち、俺とフェリは帰路についた。
そして俺だけ部屋に戻ると、どうやらラティファは買い物に出掛けてちょうど入れ違いになったらしく、人は出払っていた。
邪魔する人間は誰もいなくなった事だし、さぁもうひと眠り……といきたいところではあったが、既に睡魔は完全に俺の側から離れてしまっていた。眠ろうにも目が冴えてしまい、上手く寝付く事ができない。
「そろそろ部屋に鍵でも取り付けっかな」
がしがしと髪を掻きながら愚痴をこぼす。
しかし、それを現実にしたところで、その次の日にはどこぞのメイドに綺麗に取り外される予感

しかしなかったので却下。
結局、現状維持で満足するしかないと判断し、はぁあとため息を漏らした。
部屋にいてもこれといってする事などなく、暇潰しにあてもなく城を歩いていると――
「……って、フェリの奴、何してんだ」
つい先程まで行動を共にしていたフェリの後ろ姿を見つけ、眉根を寄せる。
立ち止まって何かをしているようであったが、場所が悪く、壁に遮られて絶妙に俺からは見えなかった。
どうせ暇だしと、彼女のもとへ歩み寄ろうとして、
「――ですから……どうか、考え直してください、リヴドラ」
そして、足を止めた。
フェリが立ち止まっていた理由が、見覚えのある黒帽子の男――リヴドラと会話していたからであると分かったから。
顔を合わせたところでどうせロクな事にはならないし、何より二人の関係に首を突っ込む気は更々なかった。
「……ま、フェリがアイツにかかりきりになるってんなら、それはそれで都合はいいか」
そう呟いて、踵を返す。
フェリにとってリヴドラが、俺を上回る悩みの種になってくれれば、俺への注意はそれだけ薄れ

るだろう。そうすればその分、帝国に一人で足を踏み入れやすくなる。
「というか、いっそもう今から――」
なんて考えたその時、平坦な声がすぐ側から聞こえた。
「――何か物騒な事、考えていませんか」
聞き覚えのあるその声音。
一体どこで聞いた声だったかと考えた直後、視界に小さな身体が入り込んだ。
「リーシェン・メイ・リィンツェル」
「お久しぶりですね。ディストブルグの第三王子さん」
目の前に現れたのは、俺の昔の仲間と同じ、何もかもが『視えてしまう』特異体質を持った赤髪の少女。リーシェン・メイ・リィンツェルその人であった。
「それはあんたの勘違いだ。世界に俺程の平和志向な人間はそういねえよ。何せ、明日は何十時間寝てやろうか考えてただけだしな」
「……一日は二十四時間しかありませんが」
嘘が全く通用しない相手だからこそ、平然とした態度で嘯いてやると、半眼で思い切り呆れられる。〝クズ王子〟は相変わらずなんですね。そう言わんばかりの視線だった。
「……うっせ。幾ら警備が厳重な城の中とはいえ、一人で歩き回る事を、よく周りの人間が許可したな」

**立ち読みサンプル
はここまで**

耳の痛い指摘だったので、すかさず話題を転換した。
リーシェンは物凄く怪しんでいたが、それを指摘する気すら失せてしまったのか。
「……まぁ、いいです」
と言って問いに答えてくれる。
「私の場合はある程度の自由が許されているんです。危険であれ、敵意であれ、視ようと思えば、それこそなんでも『視える』ので」
「……相変わらず便利な能力だな」
「その代わり、戦闘能力はからっきしですけどね」
「それで戦闘能力まで高けりゃ、あんたの兄の立場がなくなるだろ」
「それもそうですね」
グレリア兄上の友人であり、リーシェンの兄であるウェルス・メイ・リィンツェルの事を思い出しながら、俺は小さく笑う。
「……気になりますか？」
やがて、リーシェンの視線は俺から外れ、少し離れた場所で未だリヴドラと話を続けているフェリへと向かった。
この立ち位置からして、俺がフェリの事を気にしていた、と受け取ったのだろう。
「少しはな。でも、これはたまたまだ。立ち聞きする趣味はねえよ」